

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Structures of Verbal Clause in Sejarah Melayu or Malay Annals

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 紀男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004472">https://doi.org/10.15021/00004472</a>

『ムラユ王統記』におけるマレー語動詞文の構造<sup>1)</sup>

柴 田 紀 男\*

Structures of Verbal Clause in *Sejarah Melayu* or *Malay Annals*

Norio SHIBATA

This paper attempts to clarify the stylistic variation of verbal clauses in a text of *Sejarah Melayu* (Shellabear's edition).

Ten standard syntactic forms of verbal clause, limiting the analysis to the propositional parts of verbal clauses, i.e., to case relations, were established first: 1) A + M + O; 2a) A + M + O + Prep G; 2b) A + M-kan + O + Prep G; 2c) A + M-i + G + O or A + M-i + O; 3a) O + D + A + Prep G; 3b) O + D-kan + A + Prep G; 3c) G + D-i + A + O or O + D-i + A; 4a) A + S + O + Prep G; 4b) A + S-kan + O + Prep G; and 4c) A + S-i + G + O or A + S-i + G + O.

Then, explanation of the remaining syntactic forms of verbal clause is attempted using two major stylistic operations, *emphasis* and *complementation*. Here, *emphasis* means a leftward transfer of propositional terms from their standard position in standard syntactic forms of proposition, and *complementation* means a their rightward transfer. No *generative* implication to the term *stylistic operation* is intended. Thus, for instance, I explain the following verbal clause(5) as a stylistic variant of the standard syntactic form(3c), realized through the stylistic operation of *emphasis*, shown by the double arrow.

5) di atas pulau itu ditanami- nya pelbagai kayu-kayuan  
 on the island are planted by him various trees  
 5): di L + D-i + A + O ⇐ 3c): G + D-i + A + O

Another example, explained by *complementation*, shown by the single arrow, is:

\* 天理大学外国語学部, 国立民族学博物館共同研究員

1) 本稿は, 1980年度国立民族学博物館共同研究班「言語データの収集と整理」(江口一久班長)の研究成果の一部である。

本稿執筆にあたって, 当館の大型計算機によって作製された『ムラユ王統記』(シェラベア本)の索引(KWIC)及び単語頻度表を利用できた。記して関係者に感謝する。尚, 利用した索引及び頻度表については, 別註として稿末において少しく解説しておいた。

6) Patek itu lagi menyurat akan harta dan hamba sahaya  
 the vassal is registering goods and slaves

6): A + M + akan O ← 1): A + M + O

- |            |                     |
|------------|---------------------|
| 0. はじめに    | 5. 接尾辞 -kan と接尾辞 -i |
| 1. 立論の範囲   | 6. 強調と補充            |
| 2. 一次関係の設定 | 7. 分析の適用と問題点        |
| 3. 二次関係の設定 | 8. 結 び              |
| 4. 焦 点     |                     |

## 0. は じ め に

本稿は、『ムラユ王統記』<sup>2)</sup> (Sejarah Melayu) に現われる動詞文の命題的部分の、換言すれば述語動詞とそれに統合される名詞(句)の格関係の、標準形式を探り、その文体的変異として動詞文の残余の諸統辞形式を説明しようとするものである。文体的変異という用語で表わそうとするものは、技術的・運用的なものであって、生成文法論的主張を含まない。本稿は、当該テキストの文体論を目指す試みの一つである。

本稿がその資料体とする『ムラユ王統記』のシェラベア本<sup>3)</sup>は、18世紀後半までに

2) 『スジャラ・ムラユ』(Sejarah Melayu) は、英語では一般に“The Malay Annals”として知られている [BROWN 1970; WINSTEDT 1969: 158]。日本語では、殊に西村朝日太郎の著書 [西村 1942] を通して、『馬來編年史』として知られている。本稿で敢えて『ムラユ王統記』と訳したのは、次の二つの論拠からである。

一つは、民族・部族の名称を成る可く当該民族・部族の自称に近く音訳したいと考えたからである。

もう一つは、本書が編年体の歴史書ではなく、アレクサンダー大王の東征からポルトガル人のマラッカ攻略に至る時代の、空想と史実を緋い交ぜた、ムラユ族(マレー族)の王統に連なる諸王を枠組みとして、様々な伝承を編纂した物語であるからである。「編年史」という表題は不相応だと考えた。ブラウン [BROWN 1970: x] は、“Malay Annals”は“a popular mis-translation”だとしている。

ウィルキンソンは、“sejarah”を、アラブ語“shajarat”に由来し、「家系、系譜」を意味する語だとしている [WILKINSON 1959: 1036]。ちなみに、アラブ語の“šajarāt”は、「樹木、灌木、藪」を意味する [WEHR 1966: 455]。

本書の持つ歴史的・民族学的意義を、西村は次のように要約している。

「『馬來編年史』は、西紀1400年以前に於ける馬來の歴史を取扱つた唯一の馬來語の史料であり、頗る貴重な価値を有つてゐるに留まらず、馬來人の心理的性格や世界観が可成明瞭に反映してゐるので民族学的にも極めて興味の多いものである。」 [西村 1942: 2]。

3) [SHELLABEAR 1967] をテキストに、引用は全てこの版から行ない、出所を頁数・行数の順に示す。ただし、母音 /ə/ を示す短音符は全て省略し、ハイフンも [SHELLABEAR 1978] に従って、大部分を省略した。

尚、このシェラベア本を資料体として選んだ理由は、これが最も広く流布した刊本であり、現在においても最も簡単に入手できるからである。『ムラユ王統記』の写本・刊本については、[西村 1942] 及び [ROOLVINK 1967] に詳しい。

ほぼ現在の形に成立したと考えられ [Roolvink 1967: 312], その言語は, 中期マレー語の一つの変種を代表する。この刊本自体多くの文体的異質性を含んでいるが, 今はその異質性を問題にしない。本稿は, むしろその異質性の判定に一つの基準を設定する意味を持つ。

従来から, 文体論においても統辞論においても, 「強調」という概念が, 言語的直観を主要な根拠として頻用されてきた。しかし, その「強調」を形式的に捉えることは困難が大きかった。本稿の基本的アイデアは, その「強調」や, これも文体論において頻用される「省略」の概念から, 統辞論を自由にし, それらの概念を文体論の中心に据えようとする点にある。即ち, 標準的統辞形式のみを統辞論に残し, その標準形式の変異を文体的変異として文体論に組み入れようとするものである。

## 1. 立論の範囲

始めに立論の範囲を限定しておく。

第一に, ここで動詞として扱う語詞は, 一つの自由形態素を語幹 (S) として, me-S(M) および di-S(D) という2つの形態で現にテキストの中に出現するものに限られる。これ以外に動詞はないと主張するものではない<sup>4)</sup>。

第二に, 基本的パラダイム (M形, D形, S形) に属する形態のみを対象とする。M形とは, me-S(M), me-S-kan(M-kan), me-S-i(M-i) の三つを指し, D形とは, di-S(D), di-S-kan(D-kan), di-S-i(D-i) を指し, S形とは, ø-S(S), ø-S-kan(S-kan), ø-S-i(S-i) を指す。従って動詞文とは, それら9形態の孰れかを述語 (P) とする節のことを言う。

第三に, 動詞文に本来含まれている, 節遠心的要素も, 広義のモダリティーやアスペクトに係る要素も考察の対象から除外する。

動詞文の中核は, 一つの動詞と, その動詞が述語として統合する数個の名詞 (或は名詞句, 以下同断) とからなる。名詞 (N) は, それを統合する P に対して, 明示的或は非明示的關係 (R) を結ぶ。動詞文の中核は, 従って, 次のような形式を持っていると考える。

$$P + (R_1)N_1 + (R_2)N_2 + \dots$$

4) 約100語 (異なり語数) がこの基準に合致する。近代マレー語について, ペイン [PAYNE 1970: 43] は, これを他動詞の判定基準とした。この限定をゆるめて, 少なくとも M, M-kan, M-i の孰れか一つと少なくとも D, D-kan, D-i の孰れか一つの二つ以上の形態で現にテキストに現われているものに限れば, 約200語が該当する。

Pに関する特定のNの相対的位置は自由である。しかし、可能な幾つかの布置の中には、文体的に無記な本来的・標準的なものと、文体的に何らかのバイアスのかかった運用的なものがある。特定のNは、無記の位置から運用的に左或は右へ移動させることができる。左への移動を強調と呼び、右への移動を補充と呼ぶ（第6節参照）。

関係は、前置詞 (Prep) によって明示的に示され<sup>5)</sup>、或はPとの相対的位置によって非明示的に示される。

## 2. 一次関係の設定

関係は意味形成論的なものであって、どのような関係を設定すべきかを今は厳密に言うことができない。あれこれを勘案し、次のような一次関係を設定する。一次関係とは、裸の（関係非明示的な）Nが持ちうる関係である。それ以外の関係を二次関係と呼ぶ。

一般に授与動詞と呼ばれる動詞は、最も多くの裸のNを結合する。そこで、-beri “与える、許す”を述語とする動詞文について、一次関係を認定する。但し、接尾辞-iは、iで終る語幹に接尾した時、幹末の母音と融合してその在否を確認し難い場合がある。そのような場合には、同義語 -anugerah “(王から臣下へ) 賜う”、-persembah “(臣下から王へ) 奉る”<sup>6)</sup>、或は反義語 -ambil “取る”を例示に利用する。

例文中 [ ] で括ったNは、引用する節の中には現われていないが、それ以前にテキストの中に現われて既に了解済と見做し得る辞項である<sup>7)</sup>。

接尾辞のない形態 (M, D, S) から始める。

5) 主要な前置詞は、oleh, akan, ka, dari, di, dengan, pada の7つである。このテキストは、近代マレー語では極めて有りふれた前置詞である untok を欠く。マースデンの文法 [MARS DEN 1812: 91-94] も、クローファドの辞典 [CRAWFURD 1852] もこの前置詞を記載しない。

6) -per-sembah は、接頭辞 per- と語幹 sembah とから構成された二次的動詞語幹であるが、便誼例示に利用する。本稿の範囲では、これを語幹と見做しても不都合はない。

7) 殊に隣り合う節が幾つかのNを共有する時、それら共通のNは反復しては出現しないのが普通である。例えば surat itu disambut oleh bentara diberikan kepada khatib disuroh bacha (105-16) “その手紙を式部官が受け取って、祐筆に渡して読むように命じた。”この文には、次のような3つの節が含まれている。

- a. surat itu disambut oleh bentara,
- b. [surat itu] diberikan [oleh bentara] kepada khatib,
- c. [surat itu] disuroh [oleh bentara] [kapada khatib] bacha.

近代マレー語では、命令文の動詞はS形が用いられ、その動詞の意味論上の行為者は、統辞論上は表出されないと見做すのが通例である。しかし、本稿では、その意味論上の行為者が統辞論上も表出されるのが標準であると見做して、[ ] につつまで復原する。それが表出されていない場合の方を、文体的変異と見做そうと思う。

- (1) Tun Nadim mengambil hamba akan isterinya (220-22)  
 ナディム殿 取る 私 彼の妻に

“ナディム殿が私を御自分の妻にする”

- (1') A+M+O+akan G

(1) の意味論的構造を (1') と解釈する。A は起動, O は対象, G は目標である。  
 これらの用語は十分に明晰ではないが, 今はこのまま使うことにする。

- (2) [Tuan Puteri Onang Kiu] diambil baginda akan isteri (14-15)  
 オナン・キウ姫 取る 陛下 妻に

“オナン・キウ姫を陛下は妻にする”

- (2') [O]+D+A+akan G

- (3) Sultan Mansor Shah ini aku ambil akan menantuku (116-17)  
 このスルタン・マンソル・シャー 私 取る 婿に

“このスルタン・マンソル・シャーを婿にしよう”

- (3') O+A+S+akan G ⇐ A+S+O+akan G (第6節参照)

次に接尾辞の -kan ついた場合 (M-kan, D-kan, S-kan) の例を挙げる。

- (4) raja hamba mempersembahkan dia akan jadi isteri Raja Iskandar  
 わが王 奉る 彼女 アレクサンダー王の妻に

(5-32)

“わが王は, アレクサンダー王の妻として, 彼女を奉る”

- (4') A+M-kan+O+akan G

- (5) keris itu...dianugerahkan baginda pada ratu Daha (114-2)  
 その剣 賜る 陛下 ダハ王に

“その剣を, 陛下はダハ王に賜った”

- (5') O+D-kan+A+pada G

- (6) hamba persembahkan segala kata hamba ini pada tuan puteri (209-9)  
 私 申し上げる あなたのこの言葉全部 姫君に

“あなたのこの言葉全部を私が姫君に申し上げます”

- (6') A+S-kan+O+pada G

(4) の例では, G は補文である。補文のことは今不問に付す。接尾辞 -kan については下の第5節で述べるが, A と O が離隔であることを示す。

最後に, 接尾辞 -i を取った場合 (M-i, D-i, S-i) の例を挙げる。

- (7) [Segala raja2 Melayu] tiada pernah memberi aib pada  
 ムラユの王たち ない かつて 与える 恥辱 ムラユの  
segala hamba Melayu (25-26)]  
 臣下たちに

“ムラユの王たちは, かつてムラユの臣下に恥辱を与えたことがない”

- (8) Sultan Alauddin pun memberi ayahanda Sultan Pahang sabuah istana  
 スルタン・アラウディン 与える 父君のスルタン・パハン 一棟の宮殿  
 (296-28)

“スルタン・アラウディンは、父君のスルタン・パハンに一棟の宮殿を与えた”

(7), (8) は異なる構造を持っている。(1)と同じ構造の(7)の *memberi* には接尾辞 *-i* がなく、(8)のそれには接尾辞 *-i* が融合していると判断する。

(7') [A]+M+O+pada G

(8') A+M-i+G+O

- (9) [Tun Indera Segara] oleh Sultan Ahmad dianugerahi  
 インドラ・スガラ殿 スルタン・アフマッドによって 賜る

Hikayat Amir Hamzah (264-12)

『アミル・ハムザ伝』

“インドラ・スガラ殿に、スルタン・アフマッドは『アミル・ハムザ伝』を賜る”

(9') [G]+oleh A+D-i+O ← [G]+D-i+A+O (第6節参照)

次の(10)も、(9)と比較して、(10')の構造を措定できる。

- (10) [Tun Telanai] diberi nya oleh Pra Chau tempat...(104-31)  
 トゥラナイ殿 与える 彼 プラ・チャウによって 場所

“トゥラナイ殿は、プラチャウに場所をもらった”

(10') [G]+D-i+a+olehA+O ← [G]+D-i+A+O (第6節参照)

次の(11)は、述語が *-i* を取っていないとするならば、(3')と較べて、述語の右側に、G+Oではなく、O+Prep Gが期待される。そこで(8'), (9')を念頭において、(11')をその構造として措定する。

- (11) [bunda] berilah kita ra'yat dan gajah kuda (37-5)  
 母上 与える 私 人と象と馬

“母上、私に人と象と馬をお与え下さい”

(11') [A]+S-i+G+O

接尾辞 *-kan* が、AとOの離隔を示すのに対して、*-i* はAとOの近接を示す(第5節参照)。

M形に統合される唯一の裸のNがある時、そのNはAである。A以外に裸のNが一つだけある時、そのNはOである。上の諸例とこれらの基準を勘案して、次のような一次関係の標準形式を設定する。

(12) A+M+O<sup>8)</sup>

8) 形式 A+M に現われる動詞は、*-churi* “盗む”, *-samun* “略奪する”, *-urai* “解ける”, *-pakai* “着物を着る”, *-rampas* “強奪する”, *-makan* “食べる”, *-hadap* “伺候する”, *-salak* “吠える”, *-tulis* “書く” 等である。形式 A+M+[O] に現われるものと本質的な違いはなく、動詞の下位に自動詞を立てる必要はない。

- (13) A+M+O+Prep G  
 (13') A+M-kan+O+Prep G  
 (13'') A+M-i+G+O, A+M-i+O  
 (14) O+D+A+Prep G  
 (14') O+D-kan+A+Prep G  
 (14'') G+D-i+A+O, O+D-i+A  
 (15) A+S+O+Prep G  
 (15') A+S-kan+O+Prep G  
 (15'') A+S-i+G+O, A+S-i+O

これら標準形式の適用について次の点に注意しておく。

- (16) Raja Suran segera memanah Raja Chulan (14-5)

スラン王 すぐに 弓を射る チュラン王

“スラン王は、すぐさまチュラン王に弓を射かけた”

- (16') A+M+O

(16) は、(16') と解釈する。この言語には A+M+G という形式は存在しないと考えるからである。しかし、A+M+kapada G などの形式が存在することは、既に見た通りである。

一つの動詞文には、特定の関係は一回しか現われないと仮定しておく。ただし次のような例もある。

- (17) diberi baginda anugerah akan laksamana

与える 陛下 賜物 水将に

pada segala orang yang pergi itu (148-11)

出征した全ての者に

“陛下は、水将にも出征した全ての者にも賜物を賜った”

- (17') D-i+A+O+akan G<sub>1</sub>+pada G<sub>2</sub> ← G<sub>1</sub>+D-i+A+O+pada G<sub>2</sub>

(17) の構造は、(17') である。G<sub>1</sub> と G<sub>2</sub> の間には、例えば、仮目標と最終目標というような違いを考えることができるが、今は、あっさりとGのままにしておく。二種の目標は、表現上中和してしまうことも多い。

### 3. 二次関係の設定

三つの一次関係の他に、四つの二次関係を設定しておく。即ち、時間(T)、場所(L)、補助(I)、分離(B) である。二次関係は、基本的には強調によって節に入ると考えられる。

時間<sup>・</sup>は、限られた少数の語詞のみがそれとして機能するが、更に限られた数の時間語のみが時に裸で使われる他は、pada によってその関係が明示される。

場所<sup>・</sup>は、di によって明示される。

- (18) raja perempuan melihat di tingkap (66-9)  
王妃 見る 窓を

“王妃は窓を見ていた”

- (18') A+M+di L

(18) において注意すべきことは、LがAの居る場所を示すのではなく、あくまで述語の表現する現象の起る場所を示すことである。

補助<sup>・</sup>は、dengan によって明示される関係である。

- (19) Raja Chulan pun menempoh dengan gajahnya  
チュラン王 突進する 彼の象で

ka dalam ra'yat Raja Suran (13-28)  
スラン王の軍勢の中へ

“チュラン王は、自分の象でスラン王の軍勢の中へ突進した”

- (19') A+M+dengan T+ka G

分離<sup>・</sup>は dari によって明示される関係である。単に方向 (from-direction) を示すだけでなく、当該動詞幹の意味する変化に先立つ状態を示しもする。この場合、変化の後の状態はGによって示される。

- (20) [Seri Udana] tiada dipechat baginda daripada panglimanya (273-30)  
スリ・ウダナ ない 免ずる 陛下 彼の將軍から

“スリ・ウダナは、陛下に將軍職を解かれはしなかった”

- (20') [O]+D+A+daripada B

- (21) yang melihat dari balek pintu (228-26)  
それ 見る 戸の蔭から

“それは、戸の蔭から見ている”

- (21') A+M+dari B

以上に設定した七つの関係は、七つの主要な前置詞（註5を参照）に対応するものと考えられるが、その対応は単純に一对一ではない。

#### 4. 焦 点

マレー語動詞の活用形は、テンスやアスペクトを表現するのではなく、何かヴォイ

スのようなものと関連する<sup>9)</sup>。今、標準形式において節冒頭（最左）にある裸のNを焦点と名づけるならば [SCHACHTER et al. 1972: 69-71], M形とS形とは焦点に関して同類であり, D形はそれら両形とは異なる [PAYNE 1970: 19, 86]。

M形とS形の相違を見ると, Aの解釈者に関する制限が, M形については極端に緩く, S形については極端に厳しい。S形に統合されるAの解釈者として許されるのは, 事実上第1・第2人称の代名詞と運用的に第1・第2人称の代名詞となる名詞だけである。

ところで, D形に統合されるAの解釈者は, S形に統合されるAの解釈者とほぼ相補的に分布し, 両者の分布全体は, M形に統合されるAの解釈者の分布に等しい。この相補分布は, 近代マレー語にも見られ, そこでは, この相補分布に依拠して, D形とS形の機能が同一視される<sup>10)</sup>。しかし, Aの相対的位置を重視する立場からは, 上述の相補分布を, D形とS形の機能的同一視を可能にさせる種類の相補性とは見做し難い。

S形の特徴は, Aの担う機能量が極限的に小さく<sup>11)</sup>, M形ともD形とも違って接頭辞のない裸の語幹形である点にある。

以上を総合すると次のように考えることができる。M形はA焦点 (Aが焦点にあることを表示する機能を持つこと, 以下同断) であり, D形はO焦点かG焦点である。S形は, 動词语幹 (S) の意味する行動に焦点がある。即ちS焦点である。換言すれば, S形は, 非A焦点・非O焦点・非G焦点である [WINSTEDT 1927: 64; THOMAS 1980]。通例に従って, M形を能動, D形を受動と呼ぶとすれば, S焦点であるS形は非能動・非受動 (即ち中立) とすべきだろう [TCHERKHOFF 1980]。ただし, 標準形式においては, S形はM形に近く能動の相を帯び, そのO強調形・G強調形 (第6節参照) においては, 受動の相を帯びる。これは従来言われて来たことと矛盾しない [SHELLABEAR 1921: 36-37, PAYNE 1970: 86]。

9) マースデンは早くその文法書の中で [MARSDEN 1812: 52-82], 動詞を記述しているが, 今一般に受動態といわれている di-S-nya の形態を「不定過去」とし, 受動という用語は, 接頭辞 ter- によって構成される形態を「受動過去分詞」と呼ぶ場合に限って使っている。しかし, クローファドは, di- の機能を受動化であるとしている [CRAWFURD 1852: 31]。

10) この「相補分布」は, 厳密に相補的ではない。第3人称代名詞は, 稀ではあるが, S形に統合されるAの解釈者としても現われる。例えば, *telok rantau senantiasa ia payari* (301-25) “海岸線は, いつも彼が巡視している” (O+A+S-i ← A+S-i+O) マースデンは, 動詞活用の範例に, *dijabat aku, ditolong hamba* 等を挙げている [MARSDEN 1812: 70-82]。近代マレー語に関してはアリシャバナのように, ここに同一機能を認定すべき相補性を見るものも多い [ALISJAHBANA 1967: (2) 32]。

11) 註10に挙げたような数少ない例外を除けば, S形に統合されるAは, 第1人称・第2人称の代名詞である。例外を含めても, それらは広義の anaphora であって, 機能量は極小である。

中期マレー語の談話においては、談話の場の主体である「わたし」や「あなた」を、焦点にないAとして表出することができなかつたのかも知れない。そのため、S形動詞文のO強調形・G強調形が、「わたし」や「あなた」をAとする、禁じられたD形動詞文の代理を務めるようになった。これは明確な根拠あつての推測ではない。ただし、「わたし」や「あなた」を焦点におくことは、それを強調することではない。焦点と強調は別の次元に属する別々の機能である [WINSTEDT 1927: 167-168]。

## 5. 接尾辞 -kan と接尾辞 -i

-kan と -i は夫々離隔と近接を表示する。離隔とは、Aの行動がAからOを遠ざける種類のものであることを意味する<sup>12)</sup>。近接の意味は、それと対蹠的に、Aの行動がOに近づく種類のものであることである<sup>13)</sup>。共に必ずしも物理的な隔離や接近を意味しない。それは言語的隔離と接近である。Gとの関連で見れば、離隔においては、AはGに近づくことなくOをGに近づける。近接においては、AはOと共にGに近づく。だから副次的に、離隔は、AをGとよりはOと関連させ、近接は、AをOとよりはGと連関させる。標準形式の下線部に注意して欲しい。接尾辞を欠く動詞形は、この点に関して無記である。

-kan の例を見よう。

(22) Sultan Mansor Shah ... menanamkan Seri Nara Diraja (136-9)  
スルタン・マンソル・シャー 埋める スリ・ナラ・ディラジャ

(22') A+M-kan+O

(23) gajah itu dilanggarkan baginda ka balairong (224-37)  
その象 当てる 陛下 宮殿へ

(23') O+D-kan+A+ka G

(24) balairong raja Melaka ku langgarkan dengan gajahku (225-1)  
マラッカ王の大宮殿 俺 当てる 俺の象

(24') O+A+S-kan+dengan I

(25) [A] bawakan persantapan akan Seri Rama (101-9)  
運ぶ 食事 スリ・ラマに

(25') [A]+S-kan+O+akan G

12) 近代マレー語については、例えばメース [MEES 1969: 191] は、-kan の機能を“causative”と要約している。

13) メース [MEES 1969: 196] は、-i の機能を、「から」と「へ」とを問わず「場所、方向」を表わすとしている。このいい方は誤解を生む。単に「場所」とした方がまだいい [WINSTEDT 1927: 100]。

(26) [A] Bawakan persantapan Seri Rama (240-31)

運ぶ スリ・ラマの食事

(26') [A]+S-kan+O

(27) [orang kaya] charikan nasi Duli Dipertuan (278-17)

貴殿 さがす 主上の御飯

(27') [A]+S-kan+O

(28) [A] charikan kita nasi (277-35)

さがす 朕 飯

(28') [A]+S-kan+G+O

(25) において、GはAの行動の受益者である。しかし中期マレー語において、-kanに「恩恵施与」(benefactive) といった機能を措定すべき積極的理由はない(第7節参照)。(25)は、(26)、(27)、(28)と比較して見ると、(25'): [A]+S-kan+O+akan G ⇒ (26'), (27'): [A]+S-kan+O ⇒ (28'): [A]+S-kan+G+O という関連にある<sup>14)</sup>。しかし、少数の(28')型の動詞文の説明は、今未解決のまま残す。

次に -i の場合を例示する。

(29) Raja Zainal merasa luka (229-30)

ザイナル親王 感じる 傷

(29') A+M+O

(30) Raja Rekan merasai luka itu (86-1)

ルカン王 感じる その傷

(30') A+M-i+O

(31) [aku] ditikami orang (131-12)

私 刺す 人

(31') [O]+D-i+A

(32) [rusa itu] ditikam baginda dengan lembing (35-27)

その鹿 刺す 陛下 槍で

(32') [O]+D+A+dengan I

(33) [lembingnya] ditikamkan nya pada Raja Suran (14-3)

彼の槍 刺す 彼 スラン王に

(33') [O]+D-kan+A+pada G

近代マレー語では、-iの機能の一つは“intensive/iterative”と記述される[Mees 1969: 196, WINSTEDT 1927: 101]。これは-iの表示する近接の効果に由来する<sup>15)</sup>。

14) 二重矢印は、第6節で規定する強調と似たプロセスだという意味で使用した。厳密には本稿でいう強調を表記しているのではない。しかし、(25')においても(27')においても、Gの左寄せが見られる。

15) メースのいい方[Mees 1969: 196]が不透明になるのは、近接を指摘しないからである。

## 6. 強調と補充

本論は、動詞文を標準形式とその文体的運用という枠組で説明しようとしている。ここで文体的運用として括る操作は、省略・強調・補充の三つである<sup>16)</sup>。

省略については、次の事柄だけを確認しておく。話者と聴者が共通に了解している事柄は、それを繰り返し表現することも省略することもできる。Nは焦点に置かれようと否とに係らず、省略することができるが、述語動詞は焦点に置かれようと否と省略することができない。

強調とは、標準形式の中の特定のNを、その位置から左に寄せることを言う。⇒で表記し、強調される要素を下線で指示する。補充は、そのようなNを右に寄せることを言う。→で表記し、補充される要素を下線で指示する。

強調と補充に際して、Aは次の点で特異である。①焦点に置かれたA(M形文のA)は、強調も補充もされない。②D或はSを、強調する時、その直右或は直左のAもそれらと共に移動する。③Aは、強調・補充によって本来の位置を離れた時、必要に応じて本来の位置に自己の痕跡(a)を残す。

一般に本来の位置で裸のNも強調・補充によって関係明示的となる。強調・補充によって特定のNが移動した結果、その前後にあった二つのNの間に新たな統辞関係が生じる場合、Aの痕跡が有効に働く。逆に、その虞がない時、一旦は関係明示的となったNが、前置詞の省略によって再び裸になることがある<sup>17)</sup>。

強調が一つの動詞文では一回しか行なえないのに対して、補充は必要に応じて何回でも行なうことができる。一般に強調が補充に先立って行なわれる。幾つかの例を見る。

(34) di atas pulau itu ditanami nya pelbagai kayu-kayuan (19-9)  
 その島の上に 植える 彼 色々な樹木

(34') G+D-i+A+O ⇒ di L+D-i+A+O

(34)は、Gが実は様々な意味論的關係を包含していることを窺わせる [MEES 1969: 195]。

16) ウィンステッド [WINSTEDT 1927: 166-176] は、統辞論を、強調・均衡・省略の三つに分けて論じている。私が文体論の名で呼ぶ種類の論述である。以下に述べる強調と補充は、強調が強調されたものの注意喚起力を強める操作であり、補充はその逆の操作で、この極限に省略がある。ウィンステッドの言う均衡も、それらの操作を規制していることに疑いはない。

17) このような場合、問題のNが次の条件を充たすならば、それを主題と呼んでいい。ある裸のNが、「強調されていて」、かつ、その痕跡が節中に残されている時。主題は、本のタイトルのようなもので、中味と無関係では有り得ないが、統辞論的には命題部分からは切れている。Sultan Ahmad ditemoh baginda dengan gajah (263-20) ([O]+D+A+dengan I ⇒ A+D+a+dengan I)のAは、その一例である。

(35) patek itu lagi menyurat akan harta dan hamba sahaya (274-17)  
 あの臣 まだ 書きとめる 財産と郎等を

(35')  $A+M+O \rightarrow A+M+akan\ O$

ウインステッド [WINSTEDT 1927: 98] は、-kan を前置詞 akan が動詞語幹に融合したものと説明しているが、(35) はその説明に合致する。

(36) oleh Badang diambil nya parang putingnya (44-17)  
 バダンによって 取る 彼 彼の山刀

(36')  $O+D+A \Rightarrow oleh\ A+O+D+a \rightarrow oleh\ A+D+a+O$

(36') において、a は、A の本来の位置に残された痕跡である。

## 7. 分析の適用と問題点

### 7. 1. 適用

以上の分析を典型的動詞文に適用してみる。

(37) dikeluاري nya lah oleh Raja kida Hindi akan Raja Iskandar (4-18)  
 迎え討つ 彼 キダ・ヒンディ王によって アレクサンダー王を

(37')  $O+D-i+A \Rightarrow D-i+A+O \rightarrow D-i+a+oleh\ A+O \rightarrow$

$D-i+a+oleh\ A+akan\ O$

(38) dibukakan nya pintu kota oleh penghulu bendahari chempa  
 開ける 彼 城門 チャンパの大蔵卿によって

[akan Raja Kuchi] (156-15)

クチ王に

(38')  $O+D-kan+A+[akan\ G] \Rightarrow D-kan+A+O \rightarrow D-kan+a+O+oleh\ A$

### 7. 2. 強調の回数

(39) oleh Betara diambil nya keris dari bawah pahanya (118-24)  
 ジャワ王によって 取る 彼 剣 彼の膝の下から

(39')  $O+D+A \Rightarrow oleh\ A+O+D+a \rightarrow oleh\ A+D+a+O \rightarrow$

$oleh\ A+D+a+O+dari\ B$

(39'')  $O+D+A \Rightarrow D+A+O \Rightarrow oleh\ A+D+a+O \rightarrow oleh\ A+D+$

$a+O+dari\ B$

(39) は、これまでの分析では (39') のような構造を持つ。この場合、O の補充が直観的に受け入れ難い。強調を続けて二回行うことを許すならば (39'') のように分析される。

7. 3. 幹末に融合した -i

(40) [orang] akan menchari baginda nasi (277-37)

人 (未然) さがす 陛下 飯

(40') [A]+M-i+G+O

(41) beri petua olehmu segala orang di bawah angin (149-5)

与える 教え おまえが 風下の全ての人々

(41') A+S-i+G+O → S-i+G+O+oleh A → S-i+O+oleh A+G

(40) は、-i を仮定して、標準形式に分析できる。(41') は、G の補充に難点があり、問題を残している。-beri+tahu と平行して、-beri+petua という複合語幹を仮定してみても、尚問題が残る。

7. 4. 命 令 文

(42) Ambillah [emas ini] akan engkau (138-17)

取る この金 おまえのために

(42') [A]+S+[O]+akan G

命令文は、A を省略した S 形文即ち S 焦点文である。既述のように、これらの文における A の機能量は極めて小さく、容易に省略される。(41) に見るように、補充されることも稀ではない。この場合は、念押しである。

7. 5. 恩 恵 施 与 (benefactive)

-kan の機能として殊更に恩恵施与を考える必要はない。それは、G の解釈者として受益者と考え得る名詞が立ち、かつ離隔を機能とする -kan が接尾しているならば、自ら現われるニュアンスである。

(43) basohkan arang di mukaku ini

拭う 炭(恥) この俺の顔で

(43') [A]+S-kan+O+di L

「俺の恥辱を拭う」のが「俺」の為であるのは自然のことである。

8. 結 び

マレー古典の言語には、D 形動詞文が顕著である [SHELLABEAR 1921: 36-37]。それは頻度が高い<sup>18)</sup>というだけでなく、或は、そうだからこそ様々な形式を取って現われる。その多様性は、標準形式・省略・強調・補充という操作概念によって、より統一的に理解できると考え、その分析の一端をここに示した。

別註：索引及び単語頻度表について

1) ここで索引 (KWIC) と呼んでいるものは、下にそのプリントアウトの一部を示す如きものである。

di-beri-nya ber217020	ang demikian churam-nya tiada	di-beri-nya bertekan-tekan maka di-minya
di-beri-nya ema219120	leh Hang Nadim si-pelulut itu	di-beri-nya emas dan kain baju terlalu b
di-beri-nya ema226100	ksamana, diberi-nya makan dan	di-beri-nya emas. Maka segala gembala ga
di-beri-nya hor083250	segera di-suroh-nya naik, dan	di-beri-nya houmat. Maka Kata Raja Kasim
di-beri-nya kai249150	ng bermain ka-rumah-nya, maka	di-beri-nya kain atau emas atau barang b
di-beri-nya kap255270	di-tumbokkan-nya sireh, maka	di-beri-nya kapaka bendahara. Maka di-ku-
di-beri-nya mak083170	-persilakan-nya ka-rumah-nya,	di-beri-nya makan, karena bunda Raja Kas
di-beri-nya mal068330	, bunoh-lah saja; mengapa-ka	di-beri-nya malu demikian?' Maka Sang Ra
di-beri-nya mel253090	ditegah oleh bendahara, tiada	di-beri-nya melawan, kata-nya, 'Hai Hasa
di-beri-nya nai272270	baginda, yang lain-nya: tiada	di-beri-nya naik. Pada waktu itu angin s
di-beri-nya ole104320	pada tempat yang lain. 'Maka	di-beri-nya oleh Pra Chau tempat yang me
di-beri-nya ole220150	itu. Sebab itu-lah maka tiada	di-beri-nya oleh segala orang tua2 anak
di-beri-nya pad137130	lalui. 'Maka oleh bendahara	di-beri-nya maka Tun Tahir dan Tun Mutah
di-beri-nya sa-021210	Maka oleh Raja Aftabu'l-Ardz	di-beri-nya sa-ekor lembu yang amat pute
di-beri-nya si-219190	elaka. 'Maka oleh Hang Nadim	di-beri-nya si-pelulut itu obat guna. Ma
di-beri-nya: de124060	lain pula memandang, itu pun	di-beri-nya; demikian-lah senantiasaa. Ma
di-beri: tidak 294210	beri Saya berjaga? Jika tiada	di-beri: tidak saya semua-nya lepaskan,
di-berikan anan057130	Maliku't-Tahir dan sa-bahagi	di-berikan ananda baginda Sultan Maliku'

KWIC は, “key word in context” の頭字語である。最左端の単語が「鍵語」で、全ての単語がアルファベット順に配列されている。続く6桁の数字は、当該の「鍵語」が文献のどこに出現しているかを示す。最初の3桁が頁数、次の2桁が行数である。(今の場合最後の1桁は利用されていない。) その右に余白を挟んで続く文あるいは文の断片が、KWICの本体部分である。そのほぼ中央部に、頭を揃えて「鍵語」が配列されている。「鍵語」の前後の部分が、その「鍵語」の文脈の一部である。即ち、各「鍵語」は、それぞれの直近の文脈の一部と共に (“in context”) 配列されている。

2) 本稿に利用した頻度表は、「アルファベット順単語頻度表」と「頻度順単語表」の2種である。前者は、全ての単語をアルファベット順に配列し、各単語の頻度を度数(出現回数)で示したものである。後者は、全ての単語を頻度順に(同頻度のものはアルファベット順に)配列したものである。

3) KWIC 利用の最大の効用は、特定の形態の在・不在とその用例を網羅的に通覧できる便誼にある。特定の、殊に大部の、文献の言語を計量的に扱おうとする場合には、KWIC と頻度表の併用は、殆んど不可欠である。この網羅性は、また語彙史の研究にも威力を発揮するに違いない(註5参照)。

4) 本稿執筆に際して利用した KWIC 及び2種の頻度表は、そのデータベースの作製に次のような不備があったため、厳密に計量的には使用できなかった。

不備の最大の点は、刊本の正書法を、予め分析せずに入力してしまった結果:(a) 前置詞のうち、後続の名詞とハイフンで繋がれて綴られていた ka と di が独立の単語として取り出せないこと。(b) 動詞接頭辞 di- も続く語幹とハイフンで繋がれている。その為、前置詞 di+名詞と D形とが機械的には判別できない。

文 献

ALISJAHABANA, S. T.

1967 *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia 1 & 2*. Dian Rakyat, Jakarta.

BROWN, C. C.

1970 *Sejarah Melayu or Malay Annals*. Oxford University Press, London.

18) 本資料体におけるM形の総出現数とD形のそれとの比は、44:56である。(この数値は第1節で行なって限定を外した、全てのM形とD形に関する数値である。)

米自勇次の天理大学の卒業論文(1979年)によれば、Nur Sutan Iskandar の1946年の作品『ムティアラ』(Mutiarara)について同様な計量を行なった結果、M形対D形の比55:45を得ている。擬古的と言われるイスカンドルの文体においても、近代マレー語では、M形とD形の総出現数の比は、本資料体におけるそれとは逆転している。

- CRAWFURD, J.  
1852 *A Grammar & Dictionary of the Malay Language I & II*. Smith, Elder And Co., Cornhill.
- MARSDEN, W.  
1812 *A Grammar of the Malayan Language*. Cox Baylis, London.
- MEES, C. A.  
1969 *Tatabahasa dan Tatakalimat*. University of Malaya Press, Kuala Lumpur.
- 西村朝日太郎  
1942 『馬來編年史研究』(東研叢書), 東亜研究所, 東京。
- PAYNE, E. M. S.  
1970 *Basic Syntactic Structures in Standard Malay*. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.
- ROOLVINK, R.  
1967 The Variant Versions of the Malay Annals. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 123: 301-324.
- SCHACHTER, W. G.  
1972 *Tagalog Reference Grammar*. University of California Press, Berkeley.
- SHELLABEAR, W. G.  
1921 *A Practical Malay Grammar*. The Methodist Publishing House, Singapore.
- SHELLABEAR, W. G. (ed.)  
1967 *Sejarah Malayu*. Oxford University Press, Kuala Lumpur.  
1978 *Sejarah Malayu*. Fajar Bakti, Kuala Lumpur.
- SITUMORANG, T. D. et al.  
1952 *Sedjarah Melaju*. Djambatan, Jakarta.
- TCHEKHOFF, C.  
1980 The Economy of A Voice-Neutral Verb: An Example in Indonesia. *Michigan Papers on South and Southeast Asia* (15): 71-79, Michigan University Press.
- THOMAS, M. R.  
1980 Verb Affixes and Focus in Bahasa Indonesia. *Michigan Papers on South and Southeast Asia* (15): 63-69, Michigan University Press.
- WEHR, H.  
1966 *A Dictionary of Modern Written Arabic*. Otto Harassowitz, Wiesbaden.
- WILKINSON, R. J.  
1959 *A Malay-English Dictionary (Romanized)*. Macmillan & Co., London.
- WINSTEDT, R. O.  
1927 *Malay Grammar*. Oxford University Press, London.  
1969 *A History of Classical Malay Literature*. Oxford University Press, Kuala Lumpur.